

ウイリアム・ジェームズの心理學の生成

今 田 恵

ウイリアム・ジェームズの心理學を正しく論じようとする際に、ジェームズ自身に最も忠實であろうとするならば、これをその哲學及びその他の知的活動と切り離すことは出来ない。それらは凡て渾然としてその人間的統一の中に融合しているからである。ペリーが一九二〇年彼の學問的に重要な論文を集めて「小論及評論集」として出版した時、これをその主題によつて、「哲學」と「心理學」と「心靈研究」とに分けることを考えたが「そんな分類は全然不自然で筆者の思想の統一を曖昧ならしめるものである」として、「年代的配列を採用することが便利で無色であり、且つ加うるに筆者の知的發展の順序を示す便宜がある」といつて年代的配列をとつた。そしてその結果「ジェームズの書いた知られる限りの文章を近頃一讀再讀することによつて、二つの事柄が極めて深く私の心に印象づけられた。第一は、終始一貫一人そして只一人のジェームズがいたということである。彼は極めて多方面に打開いた心をもつていたにかゝわらず、ある幾つかの根本的確信に、常に無意識的に忠誠であつた。否一步進んで、一つの根源的觀念があつて、そこから彼の全思想が成長したということさへ許されるであらう。但し此際更に重要な事實として彼の思想

が實際成長したということを見逃してはならない。この根源的觀念とは、人間の心のもつ本質的な能動的關心的性格という觀念である。('the idea of the essentially active and interested character of the human mind')。第二に、私は今までにないほど、ジェームズの特別な社交的天才の反映としての並外れた知的騎士道の精神と人を遇する厚情とに、感銘した。彼は、直ちに人の心情に觸れ、直ちに讃め、直ちに他人の天賦に敬意を示す人で、時としては、他の何人も全く敬意を拂わぬ人に對しても敬意を示した」といつているが、正にその通りであると思う。ペリーはこゝに第一に感銘したと言つてゐることの中に、ジェームズ理解の四つの大切な點を指摘してゐると思う。一つは、ジェームズの思想と學問の人格的統一であり、第二はそこに一つの根源的觀念があることであり、第三はその根源的觀念は心の能動性の觀念であることであり、第四は彼の思想が成長しているということである。ジェームズの心理學を理解するに當つても、これらの點は、常に注目されなければならない。

二

ジェームズの心理學という時、私たちは二つの意味にこれを理解することが出来る。

一つは限定された領域をもつ、一つの組織的體系としての心理學であり、他は廣い心理學的興味からの論述である。

前者は、一八七五年ジェームズがハーヴァード大學において、生理學の一部として心理學の講義を開いた時から始まり、一八九二年「ブリーファード・コース」を書いた時に終るといつてよいが、もつと嚴密にいうならば一八七八年から一八九〇年まで「プリンシプルス」執筆期間中がその生成の時期であつたと言ふべきである。彼は一八七八年

には、明かに心理學を一自然科學として論述する覺悟と大望とをもつて筆を起したのであるが、その執筆の終りに近くに従つて次第にその希望を失つて行つた。そして「プリンシプルス」を書き上げた二年後に書いた「ブリーフ・コース」の結尾の章は、この種の心理學に對する彼の訣別の言葉であつたとも考えられる。「されば吾々が『自然科學としての心理學』について談ずる時、之は結局堅固なる地盤の上に立つ心理學を意味するものと考えてはならぬ。……之は科學ではない。單に科學の期待である。……現在では心理學はガリレオ及び運動の法則以前の物理學、或はラヴオアジェ以前、質量は凡ての反應を通じて變化せずとの觀念以前の化學の状態にある。心理學に於けるガリレオやラヴオアジェは、何時かは必ず出現するであらう。若し現れぬとすれば過去の成功は未來の指針にならぬ。その現れた時には確かに有名な人になるであらう。併し乍ら、かゝる人が現れた時には、問題が問題であるから彼等は必然的に『形而上學的』になるであらう。其の時までは、彼等の出現を促す最上の方法は、吾々の採りつくある闇黒が如何に深きかを悟り、吾々が出發點となした自然科學の假定は暫定的にして訂正せらるべきものたることを決して忘れないことである」こゝにも彼獨特の正直さから來たパラドックスを含んでいる。心理學は今科學として成立してゐない。しかし將來成立する希望をもつてゐる。然るに若しその希望が成就されて成立した隣には、科學ではなくて形而上學の領域に入るといふのである。今は成立してゐない。成立したら科學ではなくなる、何れにしても彼はこゝに科學としての心理學に別れを告げてゐるのである。

従つて彼は、その十二年を費した「プリンシプルス」が脱稿して、その最後の原稿を送つた時はこれを「あのいまましい本」といひ、「若しこれが印刷屋で焼けて了つても、大して氣にしない。二度と書こうとは思わぬ」と書いた。又出版者には「誰も私以上にこの本を見ることを嫌うものはいまい。如何なる主題も一〇〇〇頁を費して論ぜられる値打はない。若し私にもう十年與えられれば、これを五〇〇頁に書き直すことができる。しかし今の状態で

は、このまゝとするか、何もなしにするかである。——いやらしく廣がり膨脹し鼓脹し水腫れた塊りで、たゞ二つのことを證據立てゝいる。第一に、心理學という科學⁽⁷⁾というべきものは存在しない。そして第二に、W・Jは無能力者である⁽⁷⁾と。勿論これには彼の手紙にありがちな誇張がある。しかし偽りはない。彼は確かにそう感じたのである。にも拘らず「プリンシプルス」二巻は不朽の名著として残つた。その理由については後に論ずる所があるであろう。しかし一専門學科としての心理學を建設せんとする試みはこれを以て終つており、「プリンシプルス」は、その最後の成果であつた。故に専門的科學的心理學としてのジェームズの心理學は「プリンシプルス」であるといつて差支ない。ソーンダイクは、ウッドウオースと共に一八九五年から一八九七年の間ハーヴァードにいたが、ジェームズはもう餘り心理學の講義をしていなかった。ジェームズの下で心理學の學位論文を出したものはなく、彼はその著書しかも一つの著書即ち「プリンシプルス」で學界に影響を及ぼしたといつてゐる⁽⁸⁾。スピアマンはこれを「かつて心理學について書かれた最も成功せる著書⁽⁹⁾」という。要するに狹義の心理學即ち専門的科學としてのジェームズの心理學とは「プリンシプルス」であつて、その生成は一八七八年から一八九〇年迄の間であると斷定しうる。しかし彼の心理學的興味と活動とはこれをもつて終つてはいない。終生續いてゐる。

狹義の心理學に屬するものとしては、意志や情緒その他の問題に關する餘波的な小論文や、教師に對する講演や一八九四—五年頃に書かれた心理學的文献の批評紹介などがあるに過ぎない。それらは多く彼に對する心理學者としての社會的認識から來る外部からの要求に答えるためのものであつた。「プリンシプルス」によつてアメリカにおける第一の心理學者として認められた彼にはそれ相當の社會的要求があつて、一八九四年と一九〇四年には、二度アメリカ心理學會の會長に推されてゐる。しかしその會長講演は心理學的というよりも哲學的である。

しかしその哲學は心理學的であつた。彼の根本經驗論は哲學的であると共に心理學的である。彼は意識の研究に限

定された狭い科學的心理學の範圍を出て經驗を問題とするようになった。それは見方によれば、現代的意味においては心理學の正當な問題である。

意識から出發して、意識を超越した世界の實在を信するようになった彼は、終生、科學からは非難と排斥の目をもつて見られた心靈現象の研究に注意を拂つていた。これは恐らく彼が醫學徒として、異常心理現象に早くから興味をもつていたからであらう。殆んど彼の最初の執筆ともいうべき一八六九年の紹介はプランセットに關するものであり、一八八四年以後英國並びに米國の心靈現象研究會の會長又は會員として、靈媒、自勵書記、恍惚狀態等に眞面目で正直な注意を拂い倦くまでも實證的な態度をもつて臨んでいた。

宗教經驗に關する研究も、心理的ではあるが、寧ろ比較的限られた異常心理との連關において論じられている。そしてその代表的勞作「宗教經驗の様々」は、その副題が示す通り、人間性の研究であつた。これまた近代心理學の發達における現代的到達點と一脈相通じるものをもっている。

要するに、ジェームズの心理學は、廣狹二つの意義の心理學に分けられる。狹義の心理學とは、彼の所謂「自然科學としての心理學であり、一八七五年その講義を始めてから「プリンシプレス」完成まで、その建設に努力した所の」ものであり、廣義の心理學とは、一口に言えばその哲學の中にあらわれ、宗教研究において目指し、教育論の中に活用し、神秘經驗や心靈現象の研究の中に示された心理學である。これに對しては生涯その興味を失つていない。

そしてこの兩者の間には、明瞭な一線が引かれている。それは自然科學という枠である。勿論十九世紀の素朴な科學の概念から作られた枠であつて、彼自身はその枠の中に止まることが出來ず、新しい「物事を取扱う方法」に移つていた。それは經驗に人爲的な枠をはめて抽象と無味乾燥と不自然とに陥れることなく、具體と豐さと厚さをもつた自然の姿において論ずることであつた。これについて彼は晩年その「多元的宇宙」の中に「私自身としては、遂に正々

堂々と正直に且つ決定的に、論理を捨て去らねばならなくなつたことに氣附いた。論理は人間生活において不滅の用途をもつてゐる。しかしその用途は、我々に實在の根本的性質を理論的に把握せしめることではない。……實在、生命、經驗、具體性、直接性等何といつてもよいが、それらは我々の論理を越え、そこから溢れ出て、それを取卷いてゐるものである。」と云つておる。

以上の如く、ジェームズの心理學を、大きく二つに分けて考えることは、矛盾と非體系的の故をもつて理解が困難とされている點を解く一つの鍵であると考えゐる。

三

ジェームズの思想を體系的に論ずることは最も困難なことである。或る意味において彼は體系を否定した哲學者である。故にこれを體系的に論述することはその本質を殺すことになる危険もある。従つて最善の方法は彼自身をして語らしめることである。彼について書かれたものが殆んど例外なしに、直接彼からの引用文に満たされているのは、そのためである。簡短な文章の中によく彼の生命と精神とがあらわれており、且又最も適切な表現が用いられているためである。彼は體系の中に自己を表現してゐないけれども、その體系は彼の片言隻語の中によくあらわれている。又その表現は極めて注意深く努力をもつて選ばれてゐる。故に私たちは、彼の思想を語る時に、どうしてもその文章を引用する誘惑に克つことが出来ない。

然るに知的に理解するということは、本質的に論理的な仕事であり、何らかの體系的記述を必要とする。こゝにどのような學者を理解することの困難さがある。彼自身人間の知識を「直接の知識」(面識)と「間接の知識」(二につ

「この知識」⁽¹²⁾と分けたが、ジェームズの學問に對しても、この兩方の知識をもたねば、正しく彼を理解したとはいえない。しかも一方を他方に翻譯することは必ずしも容易でない。

バートランド・ラッセルは、ジェームズの「プラグマティズム」を読んで、感じられないほどじりじりと熱くなる風呂に入っているようで何時熱さに對して悲鳴を擧げてよいか分らぬほどであるといったとこのことで、G・W・オー
ルポートも、ジェームズ誕生百年の記念に書いた論文を、「ウィリアム・ジェームズの生産的パラドックス」と題し⁽¹³⁾、
「現代の心理學者が、彼の思想の細部を避けながら、ジェームズの名に敬意を表したいと思うにはもつと特殊な理由があると思う。その理由は今日の讀者は、はたと途方にくれるからである。最初の内は、明快と感激に引ずられて、非常に多數の個別的な觀察に對し、今までに出會つた何物よりも輝いた物として心を奪われ、熱心に同意しているが、間もなく互に矛盾し、その三段論法感を害う命題に出會す。讀めば讀むほど、矛盾は積み重つて、不快は烈しくなる。「プリンシプルス」を讀んでみると、バートランド・ラッセルが「プラグマティズ」を讀んでいる時と同じように——何時悲鳴をあげてよいか分らぬ位じりじりと沸いてくる湯に入っているように——感じるであらう。……同時に、五十二年前に出版されたプリンシプルスは、去年中に出了た多くの教科書よりも、遙かに人間行動によく透徹し、一層生々としている」⁽¹⁴⁾といひ、更に進んで、その心理思想においては、凡ゆる心理學者が何時かは當面せざるを得ない問題について、明かに矛盾を含んでいる。心身の關係について交互作用説か平行説か、方法論において客觀的實證主義をとるか、自我は經驗の主體か内容か、意志の自由と法定論、連合における部分と統一、個性と一般的法則との關係の六つをあげ、ジェームズはこの凡てに直面して解決に悩み屢々パラドックスに陥つてゐることを指摘し、このパラドックスの説明として二つの途を暗示している。

一つは發生論的説明であつて、父親を通して濃厚に受繼がれた矛盾的氣質、不安定な動搖的性格の結果であると考

えることであるが、これだけでは、彼の成熟した思想の中に見出される矛盾の意義を説明するには不十分であり、それは彼の成熟せる哲學そのものの特質によるものであるとする。即ち成熟説である。「パラドックスは、忠實に彼自身の成熟せる人生哲學を反映しているものであつて、その成熟せる活動形式に適應したものであるといふたい。結局成人した男女が普通生きるのは、その成熟せる人生觀によるのであるからである。」⁽¹⁵⁾

これは、いうまでもなく、オールポート自身の人格心理學の眼鏡を通して見た見方である。即ち彼が人格的行動の根源として、動機の先天説即ち環元説を排斥し、後天説即ち機能的自律性の原理をとることを、ジェームズの心理學的活動に應用したものであつて、その矛盾が單に先天的氣質の不用意なあらわれであると見るべきでないことは當然である。さほど不注意な思想家ではない。十分に考察した結果到達した所謂成熟した哲學そのものの特質であることは認めねばならぬ。即ち彼の矛盾は、プラグマティズムの方法と、多元主義^{プリアリズム}の形而上學と、徹底的經驗論^{ラディカル・エンプイリシズム}の認識論とによつて理解されるべきものである。これとても勿論十分ではない。彼にとつては究極的斷定的なものはない。總ては新なる經驗によつて修正さるべき餘地があり、總ての立場は冒險であり賭けであり、常に新たなものゝ可能な世界である。

この特徴は、前にも述べた通り、始めからジェームズの中にあつたものであるが、彼が心理學に集中している時代にあつては、明確な形となつて表面にあらわれてはいなかつた。自然科學としての心理學に不滿を感じて、知識と生活との根本的問題に直接當面するに至つた哲學時代において、それが次第に明かになり、實用主義、多元主義、徹底的經驗論となつて現れて來た。

そして晩年に至るに従い、彼はその學問を體系化する意圖をもつてそれに着手したのであつた。死の一年半足らず前から書き初め兎に角一應纏りをつけて遺稿として残された、「哲學の諸問題、哲學概論序説」⁽¹⁶⁾は、數年來の大きな

望みを果したものであつたが彼はこれに満足してゐなかつた。残されたタイプライターの原稿に一九一〇年七月二十六日という日附で——正にその死の一ヶ月前である——次のような序文の覚え書らしいものが誌されている。「断片的で訂正してないということ。『哲學入門』への手初め」と名づけること。私はこれによつて私の體系を纏め上げたいと思つたが、今は餘りにも一方側だけ建てられたアーチのようであることをいうこと⁽¹⁸⁾。單に哲學上の立場において全體を纏め上げる域に達したのみならず、その同じ立場から心理學的問題をも新な光の下に見ている。その具體的に明瞭な一例は、一九〇四年のアメリカ心理學會大會における會長講演「活動の經驗」⁽¹⁹⁾である。彼はそこに明かに、活動の經驗が心理學者にとつて、本來興味ある問題であるのみならず、自分は最近問題を體系的な方法で取扱うことに興味を深く感じて來た、その方法とはプラグマティックの方法で、この新しい傾向に「徹底的經驗論」と云う名稱を與えていると述べている。そして狹義の科學的心理學の與件であつた「意識の流れ」がこの心理學では「活動の經驗」に變つて、こゝに心理學の領域が擴大されたことが認められる。これはジェームズ自身の心理學の變化であると共に、近世心理學の變化にも適應するものと見て差支ないと思う。

一見困難に見えるジェームズ心理學の矛盾は、ペリーの言の如く、一貫性と發展性があり、一貫性ははじめ未分化な状態で現れていたものが、次第に發達するに従つて明瞭になつたものである。故に我々は彼の心理學の發達を生成の過程において考察することが最も適當であると考えるのである。

四 自然科學としての心理學

我々は先ず、ジェームズの心理學の中で、狹義の心理學と名づけたもの即ち「心理學原理」(プリンシプルス)と

その短縮である「心理學要論」(ブリーファーク・コース)に説かれている、彼の所謂自然科學としての心理學の生成の過程を追つて見た。

(一) 彼が新興の科學的心理學に積極的關心を示すに至つた時期は、その書簡によつて明かである。即ち一八六七年その二十五歳の時、煩悶の醫學生としてドイツに一年の留學兼靜養の時期を過していた時であつた。醫學生として生理學の研究にせめてその哲學的欲求の満足を見出さんとしていた彼は、心理學が科學たらんとする時が來たと感じた。「私はこの冬中に果したいと思う生理學と心理學との讀書の計畫を立てた——ドイツ語を讀むことはまだ忌々しく遅いのであるが……私には心理學が科學になり始めた時期が恐らく來たのだと思われる。——神經内の物質的變化と(感官知覺の形において)對象の意識の出現との中間にある領域において或る程度の測定が既に行われ、更に今後も出て來るであらう。私は既に知られている所のことを勉強しようとしている、そして多分自分でも多少研究することが出来るだろう。ハイテルベルグにいるヘルムホルツと、ヴントという人間とがその研究をしており、私は夏には彼らの所に行くために冬を越したいと思う」⁽²⁰⁾とベルリンから友人トーマス・ワードに書き送つてゐる。彼が心理學が科學とならんとする域に達したと見た、その當時の自然科學的心理學とは何であつたといへば、フェヒネルの精神物理學であり、ヘルムホルツ⁽²²⁾とヴント⁽²³⁾の神經生理學、感官生理學及びそこから出た生理學的心理學であつた。又ロツツェ⁽²⁴⁾の「醫學的心理學」を精讀している證據がある。

これと共に、精神病學及び催眠術にも多大の興味を示している。しかしこれは當時の新しい科學である生理學的心理學からはその一部を形成するものとは認められていなかったが、しかもジェームズは其所に貴重な資料を認めたのであつた。こゝに始めから、ヴントの實驗心理學と食い違ふ點があつたのである。

(二) 「心理學原理」に代表されるジェームズの心理學は、彼のハーヴァード大學における講義と共に發達したことは、その序文の冒頭に明言されている。⁽²⁶⁾

彼が生理學の一部として心理學の講義を始めたのは一八七五年であつて、グラデュエートでは「生理學と心理學との關係」と題して講義した。その翌年からはアンダーブラデュエートのために「生理學的心理学」が講じられるようになった。一八七七年には心理學の講義が哲學科の科目に移された。こゝで傳統的な哲學出の心理學と接木されたといつてよい。後年往時を追懷して「私は元來生理學者となるために醫學を學んだのであるが、一種の宿命ともいふべきものから、心理學と哲學とに流れて行つた。私は嘗て哲學の授業を受けたことはない。私が聞いた最初の心理學の講義は私が自分でした講義であつた」⁽²⁶⁾のであり、「心理學原理」の「既存の心理學的知識の綜括ではなく、その擴大と訂正とであつた。凡ゆる問題は『障害に満ち』それを『緩和』するには多年を要することを見出した。一つ一つの文章が『如何ともしがたく動かしがたい事實に正面から向つて』作り上げられねばならなかつた。彼は『事實の抵抗』に打克つのみならず『他の哲學者たちの抵抗』にも打克たねばならなかつた。『ヘルムホルツをもスペンサーをも殺すとは冗談ではなかつた』のである。心理學という『科學』は、一段落毎に『何か豫想されなかつた障害』が現れるほど、『混亂した不完全な状態』にあつた。換言すれば、一八七八年から一八九〇年迄、ジェームズは、心理學に關する體系的著述を書綴つていたのみならず、觀察をし、満足な假説を求め、激しい論争的な戦をしていた⁽²⁷⁾」のであつた。

その十二年間に、彼の心理學が如何に形成されて行つたか。『心理學原理』の二十八章が、その順序で書かれたものではない。勿論その最後の形に纏める時には、書き更め整理しているのであるが、その内容は、異つた順序で次第に彼の心の中に成長して行つたものである。その主要なもの多くは、論文の形でマインドその他の雜誌に發表せら

れ、これによつて略、その成長の狀態を窺ふことが出来る。

體系的心理學の發端は、一八七八年に、スペンサーの心理學における心の定義を批評した時である。⁽²⁸⁾これはジェームズの最初の纏つた論文と見るべきものであつて、スペンサーが心を環境への對應として定義したのに對し、環境への適應を否定はしないけれども、心についての根本的事實は、その能動的な興味又は關心性^{イレグレスト}或は選擇であることを主張したものであつて、これはジェームズの心理學、認識論、哲學、宗教哲學の根本思想となつたものである。

その後一八八二、三年までに、『心理學原理』の構成に寄與した六つの論文があらわれているとペリーはいう。ペリーはその六つを擧げていないけれども、第一は「動物及び人間の知」⁽²⁹⁾（一八七八年）で、連想と推理に關する最初の論述であり、一部は第十三章推理に轉用されている。第二は「我等は自動機か」⁽³⁰⁾（一八七九年）であつて、生理學者としてのジェームズが、身體殊に腦の機械觀と、意識の能動的有効性とを如何に調和すべきかについて苦しんだ問題を論じている。自動機械說については「原理」第五章に更に十分に論じられ、意識の選擇の有効性に關する部分は第九章「考えの流れ」の終りに引用されている。第三は「空間質」⁽³¹⁾（一八七九年）で、空間知覺の先天説を主張し、これは「原理」第二十章に更に十分に展開されている。第四は「合理性の感情」⁽³²⁾（一八七九年）で、この論文は、單に心理學のみならずもう少し廣く彼の哲學をも含めた全思想の根幹である。「原理」第二十二章推理の所に引用されている。第五は「觀念の連合」⁽³³⁾（一八八〇年）で、大部分は殆んどそのまゝの形で「原理」第十四章連合の章に用いられている。第六は「努力の感じ」⁽³⁴⁾（一八八〇年）で、意志に關する最初のそして最も力の入つた論文である。「原理」の第二十六章意志はこの論文に基づいてゐる。

こゝまでは、意識の能動的有効性を、疑うべからざる原本的事實として認め、其所に心理學の獨特な研究領域を見出し、これと物的環境、身體との關係を明かにせんとし、その當然の結果として、生得説、意志自由の問題にすゝん

だ、一口に言えば、意識の有効性 (Efficacy) を中心とする時代であつた。ジェームズの書簡集の編集者である、その子ヘンリー・ジェームズは「ペリー教授の附註著作録を一覧した讀者は、彼が一八八三年までに重要な論文を書いており、彼の心理學の中における獨創的なものゝ大部分はその時までにはその心に存在していたことを知るであらう。」⁽³⁵⁾ といつてゐることは事實であるとしても、意識の事實を如何に科學として構成すべきかについては明確な考えが纏つていなかったようである。基本的な事實はつかめたけれども心理學を科學の家族の一員とすることについてはほ探索の時期を出なかつた。

一八八三年には、出版された發表が一つもない。一年中何も發表しないのはその生涯中この一年だけであつて、彼にとつてこの頃は行詰りを覚えその打開に苦慮していた時であつた。一八八二年は、餘事に妨げられず専ら心理學を執筆したい意向もあつて、一年の休暇を得てヨーロッパに旅したのであるが、十二月に至つても、まだ六頁しか書いていないと告白せねばならなかつた。⁽³⁶⁾ 翌年一月には多少進んだが、二月に至つてこの困難が打開され、その心理學の支柱となる「心理學的眞理」に到達したようである。即ち二月十日附ロンドンからその妻にあてた手紙にそのことが書いてある。

『昨日私は、あなたのよく知つてゐる、觀念が突然群つて來て何も纏つたことを考えることの出来ないような、私の熱にうかされたような状態になつて、一つの心理學的眞理を産み落した。私はそれを一氣呵成に書きとめて、夕方先約があつたので、そのこと——^{フイリッシュ}感じと考^{ソート}えとの差異——について話した。……私は、私の言つたことが科學的に極めて重大であることを、確信してゐる。⁽³⁷⁾』この二月九日に産れた「心理學的眞理」が、その夏コンコードで語られ、後に「マインド」に掲載された「内省心理學において見落されたもの」⁽³⁸⁾と同じ内容であることはペリーの考察によつても推定されてゐる。こゝで彼は意識の流れの中に、實質的部分を取巻く「量」^{ヘロー}或は「邊緣」^{フリンヂ}があることとその重

要性と述べ、邊緣の有無によつて意識狀態を感じと考へるとに區別し、何れも同等に確實な意識狀態として、同等の權利をもつて心理學の對象となることを主張した。ソーンダイクも、ジェームズの最も重要な心理學的發見は、彼の所謂心的狀態の「邊緣」の存在と重要性であるといつてゐる。⁽³⁹⁾これによつて彼の科學としての心理學の統一原理が確立されたといつてよい。その意味においてこの年は彼の心理學が、體系というべくは、體系づけられたのである。この内容は「心理學原理」の基本的な諸章に見られる。第七章心理學の方法と困難、第九章考への流れ、第十章自我の意識、第十二章概念の中に屢々引用されている。

更にこの年は、彼を最も有名ならしめた情緒説⁽⁴⁰⁾の發表された年である。その情緒説は、彼の唯一の特殊の心理學的理論として注目されているが、意識と身體との相關關係についての一般心理學の見地からも注意すべき問題を含んでいると思う。心理學の生成に關する限り、一八八四年はクライマックスであつて、ジェームズ心理學の獨創的な基本的事實と原理とは確立し、その後の諸章は比較的容易に進捗したのであつた。

一八八六年からその翌年にかけては、三分の二が出来上つた。一八八七年四月弟への手紙では、今年ほど容易く仕事の出来たことはなく、夏休み前にもう二章を書くつもりで、もう三分の二以上出来たといつてゐる。⁽⁴¹⁾その二章は何であるか知る由もない。しかしこの二年間に雜誌に發表されたものだけで時間知覺⁽⁴²⁾、空間知覺⁽⁴³⁾、習慣⁽⁴⁴⁾、本能⁽⁴⁵⁾、人間の本能⁽⁴⁶⁾、この外一度マインドに送られながら本が出るまで掲載されなかつた自我意識も空間知覺と同じ頃に書かれていた。そして最後は一八八九年の「信念の心理⁽⁴⁷⁾」であつて、「心理學原論」の第二十一章實在の知覺を形造つてゐる。これをもつて見れば、「心理學原理」の殆んどどの章の起原は判明している。若し完結した書物が、「一層よく知つてゐる一層具體的な心的方面から、後に抽象作用によつて自然に知るに到る所謂要素に進む⁽⁴⁸⁾」順序によつた組織を示すものであるとするならば、その各章の起原の時間的順序は、彼の心理的順序を示すもので、前者を靜的體系と假に名

づければ、後者は動的體系ともいふべきであらう。

これを要するに、ジェームズの科學的心理學は、生理學的心理學との接觸を機縁として起り、スペンサーの心理學に對する反動として意識の能動的有効性にその不動の基本的事實を發見し、これを如何なる意味において自然科學たらしめうるかを考察して、その建設を試み、やがてその限界を認めるようになったのである。故に、彼の心理學は、意識の有効性と、自然科學としての心理學とに關する彼の考えを明かにすることによつて理解されうるのである。

後記

私は、以上をもつて、ジェームズの狹義の心理學、即ち彼が建設を志し、十數年を費して建設し、そして最後に放棄した所の、彼の科定的心理學の生成の過程を辿つたのである。そして、それは、意識の有効性の問題と、自然科學としての心理學の意義との二つの問題に歸着せしむべきことを見た。故に、次に私はこの問題について述べる豫定である。

然らば、狹義の自然科學的心理學を、何故放棄又は一時的なりとも斷念したか。それは彼の知識論に關連する。彼が、一八八三年に科學的心理學の立場を確立した頃から、彼は意識と外界認識との問題に悩み、その自然科學的心理學の究極の與件であつた、意識の制限内に止まることが出来なくなつた。偶々、同時に心靈現象の研究に興味を起し、意識の限界で出て生命的活動の領域に入つた。そして晩年においては、狹義の心理學と廣義の心理學とを調和統一せんと努力していたように思われる。そこまで辿つて、始めてジェームズの心理學の全貌は略明かになるのであらうと思う。但しそこはジェームズも豫言した通り科學でなく哲學であるかも知れない。

しかしジェームズが、人間探求の出發點としたその心理學は、彼自身の失望にも拘らず又我々の心理學の確かな出發點でもある所に、彼の心理學の今日に至るまで動かない價值があるのであらう。しかしそれは出發點である。我々は出發點に止つていてはならぬ。しかし、中途で終點に到達したと考える人は、今一度出發點は歸らねばならぬ。

「の終止なきの討論である。故にこの論文は、その極めて豊かな一部分である。」

(註) 略字の説明は末尾にある

1. CER VIII
2. 同上
3. 同上 IX-X
4. PP V
5. PBC 468 (今田譯 下 285)
6. LWJ I 293 (May 24, 1890), (今田 ウイリアム ジェームズ 110) 妻への手紙
7. LWJ I 294
8. Thorndike, E. L. James' Influence on the Psychology of Perception and Thought. Psychol. Rev., 1942, 50, 87.
9. Spearman, C. Psychology down the Ages. London, Mcmillan, 1937, II, 3.
10. The Experience of Activity. 1904, CER
11. PU 1909, 212.
12. 'Knowledge of acquaintance' と 'Knowledge about.'
13. Allport, G. W. The Productive Paradoxes of William James. Psychol. Rev., 1943, 50, 95-120.
14. Allport, C. W. ibid. 95-96.
15. Allport, G. W. ibid. 113-114.
16. Allport, G. W. Personality, a Psychological Interpretation. 191-212.
- ” The Functional Autonomy of Motives, Amer. J. Psychol., 1937, 50, 141-156.
17. Some Problems of Philosophy, A Beginning of an Introduction to Philosophy.

今田恵 ヲイリテス ジェームズ 243-246

18. SPP VII, VIII.

19. The Experience of Activity. Psychol. Rev., 1905. ERF 155-189.
20. LWJ I 118-119 1867? 十一月頃々ルリソ發手紙の一部
21. Fechner, G. T. Elemente der Psychophysik (1860 年)
22. Helmholtz, H. Handbuch der Physiologische Optik (1856-66.
23. Wundt, W. Beiträge zur Theorie der Sinneswahrnehmung.
24. Lotze, Medizinische Psychologie. 1852, を 1867 に讀む
25. PP V
26. Perry I 228 x y Letter of Aug. 16, 1902, published by A. Menard, Analyse et critique des principes de la psychologie, 1911, 5, note.
27. Perry I, 40.
28. Remarks on Spencer's Definition of Mind as Correspondence, Journ. of Speculative Philosophy, 1878, 12, 1-18:
CER
29. Brute and Human Intellect, Journ. of Speculative Philosophy, 1878, 12, 236-276.
30. Are We Automata, Mind, 1879, 4, 1-22.
31. The Spatial Quale, Journ. of Speculative phil. 1879, 13, 64-87.
32. The Sentiment of Rationality, Mind, 1879, 4, 317-346.
33. The Association of Ideas, Popular Science Monthly, 1880, 16, 577-593.
34. The Feeling of Effort, Anniversary Memories etc. CER.

35. LWJ I, 223-224.
36. Renouvier への手紙 December 6, 1882.
37. Perry, II, 38.
38. On some Omissions in Introspective Psychology. *Mind*, 1884, 9, 1-26.
39. Thorndike, E. L. James' Influence of the Psychology of Perception and Thought. *Psychol. Rev.*, 1942, 50, 88.
40. What is an Emotion, *Mind*, 1884, 9, 188-205.
41. To Henry James, Apr. 12, 1887. LWJ I 268.
42. The Perception of Time, *Journ. of Speculative Philosophy*, 1886, 20, 374-409 (PP Chap. XV.)
43. The Perception of Space, *Mind*, 1887, 12, 1-30, 103-211, 321-353, 519-548. (PP Chap. XX)
44. The Laws of Habit, *Pop. Sci. Monthly*, 1887, 30, 433-451. (PP Chap. IX)
45. What is an Instinct? *Scribner's Mag.*, 1887, 1, 355-365. (PP Chap XXIV)
46. Some Human Instincts. *Popular Sci. Monthly*, 1887, 31, 160-167, 666-681 (PP Chap. XXIV)
47. The Psychology of Belief. *Mind*, 1889, 14, 321-352. (PP Chap. XXI)
48. PBC IV (今田譯 心理學 上 10)

本論文中文譯註

- PP Principles of Psychology.
- PBC Psychology, Briefer Course.
- PJ Pluralistic Universe.
- SPP Some Problems of Philosophy.

ERE Essays in Radical Empiricism.
CER Collected Essays and Reviews.
LWJ Letters of William James.
Perry Perry's The Thought and Character of William James.

——關西學院大學文學部教授——